

伊勢湾台風 50 年シンポジウム基調講演

「いいまちづくりが防災の基本、しのぎの防災システムの提唱」

大阪人間科学大学 教授 片寄俊秀さん

司会者：「いいまちづくりが防災の基本、しのぎの防災システムの提唱」と題しまして、大阪人間科学大学教授の片寄俊秀様よりご講演いただきます。ご経歴は正面右側のスクリーンに投影しておりますので、ご紹介は省略させていただきますが、水辺と下町をこよなく愛するまちづくりプランナーとしてご活躍でございます。片寄先生、よろしく願いいたします。

片寄教授：みなさん、こんにちは。じつは私は災害が大嫌いでございます。もっとも、好きな人は少ないと思うのですが、その大嫌いな災害について研究しております。ただ、災害は悪いことばかりではないのです。それはどういうことかと言いますと、人間の文化・文明を振り返ってみますと、災害との戦い、あるいは災害をどう克服するかという、そこで知恵を絞って、人間の文化・文明が発展してきたという面が否めないからであります。

災害は嫌な、困ったものではありませんが、それを「災い転じて福となす」というように知恵を育む場でもあると前向きに捉えてみる必要がある。今日は、そういう考え方に立って「いいまちづくりが防災の基本」というお話をいたします。どういうことかと言いますと、まちづくりとして防災の問題を考えようということです。

守るに値するいいまちかどうかというのが、いざ災害という時に、人々が結束して事に当たれるかどうかの分かれ道だと考えています。いいまちをつくる、いい人間関係をつくる。住みよいまち、住みよい暮らし、これが防災の基本だ、と考えています。防災まちづくりと言いますと、すぐコンクリートで固めるとか、ダムをつくるという話が先行する場合がありますが、そうではなくて、いいまちをつくるという事こそが大事だというお話にしたいと思います。

【 1 最近の特徴的な水災事例から 】

まず、最近の特徴的な水災事例、水系の災害、地震もありますし火事もありますしいろんな災害がありますが、水系の災害で皆さんの記憶に新しい3つの事例をご紹介します。そこから教訓を得たいと思います。

山口県防府市の老人ホームが土石流の犠牲になった。そこで8名の方がお亡くなりになりました。兵庫県佐用町、佐用川これは千種川の支流ですが、その水害はつい最近8月9日にございました。それから1年前ですが、神戸市の都賀川。ここでは川で遊んでいた子供たちが突然増水した川で流された。非常に特徴的な水害、水災なので、その教訓を整理してご紹介したいと思います。

山口県防府市の老人ホーム災害 2009年7月21日

(教訓) 設置段階で、立地場所の危険性に気づかねばならなかった。地形を読む力を一人一人が持たねばならぬ時代。元の地形を尊重すべきこと。同時に、よく観察して、環境が変わったことを知らねばならぬ。高齢者の居場所は、できるだけ「まちなか」につくりたい。

まずは、2009年7月21日の防府市の災害でございます。ここは養護老人ホームで、ピカピカの美しい建物であります。ここが土石流の犠牲になりました。なぜ犠牲になったか。これはちょうどこの老人ホームに向かって山の上から川が真っ直ぐにきておりまして、そのまま老人ホームに突っ込んだのです。この川は曲がっておりましたが、川が勝手に真っ直ぐにいつってしまった。なぜかと言いますと、この老人ホームをつくる時に、川側のほうを少し削っているのです。低くして水が来やすいような状況をつくってしまった。これはある意味では技術的な失敗であります。この川が土石流の起こりそうな危険な川であるということ

は、老人ホームを造られた方も認識しておられて、「早く砂防ダムをつくってくれ」というふうに県に対して要請しておられた。それが遅れたという事ではありますが、しかし砂防ダムもそれほど効くものではないのです。土石流というのは山の上から走り出すのです。始めはちよるちよると来るのですが、周りの土や石を巻き込みまして、急斜面を走ってきます。この速さは100mを5秒ぐらいですから秒速20m。あの世界新記録を出したボルト選手も逃げる事が出来ないのです。ものすごい勢いで落ちてきます。土石流というのは、大きな石を先頭にその前をじゅるじゅるとした鼻水のようなものが先に走ります。その上を巨大な石を先頭に竜が頭をもたげるようにして落ちてきます。長野県のほうでは、これを「蛇抜け」、蛇が上から落ちてきた、そういう表現をしますが、それがまともに来た。この老人ホームが建っているところは、落ちてからちょっと平地があって建物がありますから、この大きな土石はこの建物までは来ていません。ホームの中は土砂で埋まった。砂と水が入ってきて、1階でくつろいでおられたお年寄りが犠牲になられた。だから建物はびくともしていません。

この経過を見ますと、どこに誤りがあったのかということが見えてきます。私なりに分析したのは、まず教訓としては、設置段階で立地場所の危険性に気が付かなくてはならなかった。土石流の危険のある河川の前であるということを知っていたのか、知らなかったのか。実はここは地価が安かった。安い場所にこういう建物が立地していることに大きな問題がある。と同時に地形を読む力を一人ひとりが持たなくてはならない時代だ。人々自身が、市民自身がいろんな力を持たねばならない時代だということを改めて気づかされた事件であったと思います。

それから、元の地形を尊重しなくてはならない。もともとこの川は真っ直ぐにいていた可能性があるのです。無理やり曲げていたのかもしれない。自然は元に戻ろうとする。つまりよく観察して環境が変わ

ったことを知らなくてはなりません。以前と比べると周りの環境が色々変わってしまっているのです。この山は実は造林ではなく、雑木林であったから比較的強いと言われてはいますが、雑木林でも安心できません。昔は雑木林も炭の材を伐るために、しょっちゅう人が入っていましたから太陽の光が入って地面に下草がよくできましたけど、今は炭焼きがなくなって樹木が大きくなりすぎたために、いわゆる二次林というのですが、自然系の山でも地盤面が裸地になっていて保水力が無くて、危険なのです。

それから高齢者の居場所をここに持ってきた、このこと自体が日本の福祉行政の貧しさというのでしょうか、こういうところに造るのではなく、もっとまちなかに造るべきではないのかということに改めて感じるわけがあります。

兵庫県佐用町水害 2009年8月9日

(教訓) 流域の山の保水力が低下し、地域の危険度が高まっていた。そこへ「想定を超える」降雨。役場や病院まで、水に浸かった。しかも、町村合併で、職員が地域の実情をよく知らぬという問題があった。避難場所の設定に問題があった。

続きまして、この8月9日に起こりました兵庫県佐用町の水害、これは久々に起こりました水系の水害、水でやられた水害でございます。ここでは、一昨年台風で山に放ったらかしにしていた倒木が流れてきました。山中に放ってあった木が流れてきますと、最初は流れに沿って進むのですが、なぜか橋のあたりにくると真直ぐに立つのです。これは河川災害の1つの特徴がありますが、なぜか真直ぐに立って橋げたに引っかかって、そこがダムになり、ダムアップした洪水が周辺に氾濫して災害を起こすのです。これが不思議で私も以前から被災現場でしばしば目撃しております。何故か木が立つのです。つまり橋は常に危険なものであるという認識が必要だろうと思います。

下流部ではまちの中に土石が入って、ひどいことになりました。商店街ではこの災害をまったく予想しておられなかったそ

うです。想定を超える水量の雨が来たわけでありませぬけれども、こういうときに頼りにしたい役場がやられております。つい数年前に合併したところですよ。4つの町が合併して佐用町になりました。その役場が水害でやられて機能していませんので話になりません。地域の行政当局が、自然を甘く見ていた可能性を否定できないと思います。

もう1つの問題が合併問題と災害の関係です。皆様のなかにもいろいろ経験された方がおられるかと思うのですが、災害時には合併が裏目に出るのです。これは非常に大きい問題だと考えています。市町村合併が行われますと、もとの町役場が支所に格下げされて、そこの支所長にまったく違う町に育った人が赴任して来ます。以前だったら、その町の出身の方が町長になられる。そして町のことはだいたいよくわかっておられた。どのあたりがどう危ないかを知っておられたのですが、町のことを全く知らないような支所長のもとに、おなじく町を知らない支所の職員が災害のときに詰めているという問題が起こるわけです。

また、技術的な問題ではありますが、災害対策として堤防を築くときに、担当の技術者が、その川の「川相」(川の個性)を的確に読んでいないのではないかと思います。

大きくカーブを描いている佐用川のこの場所では、川には直進してきた勢いがありますから、曲がり角では洪水が正面の堤防に激突する、つまりその部分の堤防は常に危険にさらされています。こういう所は技術的に言うと、コンクリートできちっと固めて水をはり受け止めなければならぬ。しかし、数年前にその部分が一度流れたあとの補修工事では、堤防の削られた部分に土を積み増しただけであったので、その箇所がまた今回やられています。これは当時の技術的な措置に問題があったのではないかと思います。

もう1つ佐用町の水害で、痛ましい事件がありました。町営住宅にお住まいの方が、避難命令が出たので、避難するために町営住宅から親子やら全部で10人ぐらいが口

で互いにつないで、避難したそうです。道の途中に川がありまして、この川を越えるのが大変だったのですが何とか越えたのですが、なんと川を越えた先にもう一本農業用水があったのです。それに誰も気が付かなくて、足をすくわれてここで流されてしまったのです。あたり一面が泥水で地面が見えないものですから、どこに何があるのか分からない。人々が流された場所から、もうちょっと行ったところが避難場所です。避難場所は学校なのですが、明らかに避難場所の設定がおかしい。避難を指示した時間の遅れが問題になっているようですが、私は川を越えて避難すること自体にまず無理があったと考えます。このケースの場合は、避難しないで家にじっとしていれば、無事だったわけです。



この佐用町水害の教訓を整理しますと、流域の山の保水力が低下してある。地域の危険度が高まっていたように思われます。想定を超える豪雨だと言われていますが、私が1982年に長崎で経験した大雨は1時間に187mm、18cm7mmの高さの量の雨が1時間に降ったわけです。これは日本記録で

す。その前の日本記録は徳島で起こりました時間雨量 162 mm。187 mmはまだ破られていません。日本ではそれぐらいの雨が降るのです。長崎、徳島といっても決して遠い国ではなくて、この辺りで降ってもおかしくはない。降雨の水量の想定は慎重にしなければならぬのです。

以上申し上げたように、役所や病院までも水に浸かった、しかも町村合併で職員が地域の実情をよく知らないという問題があった。あと、避難場所の設定に問題があった。先程も言いましたように、川を渡って避難するというのは非常に危険です。避難場所については、それぞれの人がいざというとき自分がどこに避難するのか、自力で何度も確認する必要があります。この避難場所はどれも危ない、ここに自分は避難したくないと感じたら、役所の人に話をして避難場所を変える必要がある。避難場所は必ずしも公共の場所ではなくていいと思います。皆さんご自身が、自分の避難場所はここだと決める、それだけの努力と力量がそれぞれの人に必要の時代であるというのを、この災害の教訓にしたいと思います。

神戸市都賀川増水 2008 年 7 月 23 日
(教訓) 川には個性がある。(みんな違って、みんないい) 楽しい、しかし、ときには恐ろしいことも知らねばならぬ。そのことを、一緒に遊んで教えるのが、大人の仕事! 河川管理には「想像力」と「創造力」(さりげない保安)が必要。

3 番目の事例は、神戸で昨年 7 月に起こりました。子供たちが遊んでいた、きれいに整備された川で、兵庫県はこの川は親水性、親しむことができるとパンフレットに載せて自慢をしていた川です。これが裏目に出たのです。ここで遊んでいた子供たちが、20 分後に流されるのです。

10 分前に雨が降ってきました。雨が降ってきたので、一部の人は橋の下に避難したのです。その時に上がってれば助かったのです。その 10 分後、突然水がダーと流れてきて、そこにいたすべての人たちが流されていったのです。たった 10 分です。その 4 分後には川は濁流と化しています。

これについて神戸大学の藤田先生が、コンピュータでシミュレーションされまして、じつは 10 秒ぐらいのスピードで水がやってきたと解析されています。これは神戸という地形が非常に急傾斜であると同時に、川を三面張りではっちり固めてしまった。途中で水を止めるところが全くないという技術的な問題もあります。逃げ場、隙間がなかった。もっと密に横の岸辺に階段があったら逃げる事が出来たと思います。

ここでの教訓を整理してみますと、川には個性があるということ。どの川もみな違う。後から、いろんな川の説明もあるかと思いますが、みんな違う。金子みすずの言葉で「みんな違って、みんないい」とありますが、川はみんないい、すばらしいもの。川は子供たちにとっては、本当にいろんな遊びが出来る場所。小さい子は浅瀬で遊ぶことが出来るし、ちょっと大きくなると下流のところまで冒険してみる。いろんな遊びができるし、魚を捕ることもできるし、シジミを採ることもできるし、いろんな恵みを与えてくれる。そしてまことに楽しさと景観を良くしてくれるし、酸素を送り込んでくれる。川はいいものなのですが、みんな違う。1 本 1 本の川について皆さん身近な川をよく知らなくてはならないと思います。楽しいし、しかし時には恐ろしいことを知らねばならない。そのことを一緒に子供たちと遊んで教えるのが大人の役割だよということを、改めて教えてくれたのが都賀川の災害ではないかと思います。

ただ、今の大人をそんなに信用してはいけません。今、学校の先生になっておられる若い人たちは、子どもの頃どうやって育ったか。「川で遊んではいけない。良い子は川で遊ばない。」こんな標語がまちを覆いつくした頃の子供たちが先生になっているわけです。だから、今、川のことを一緒に遊んで教える役割は、もっと上の世代、ここにもおいでになります。私も含めてじいちゃん、ばあちゃん、ここが頑張りねばならない。今こそ我らの出番だというふうに思っただけならばと思います。

もう 1 つは河川の管理で、技術的な想像力、ということが起こるのかということ

について想像する力が必要で、行政技術者の力量の問題であります。がちがちに固めるのがいいのではなくて、さりげなく安全を守る、そういう創造性豊かな技術力が必要な所以であると思います。

【2 災害の問題は、つねに被災者の立場から考えるべきこと】

災害って何だろう。災害には色々あります。地震、雷、火事、親父などと言いますが、私自身も災害は嫌いと言いながら、まちづくりを研究しております者として、災害の現場はどうしても見なければならぬ。どうやって復旧、復興したらいいのだろう、いいまちはどうしたらつくれるのだろうということを研究しておりますので、いろんな現場を見ております。

長崎県の雲仙普賢岳の噴火災害はすごいものでした。地球というのはこんなものなのか。いきいきしているんです、地球が。圧倒される思いがしました。また阪神淡路大震災で、高架道路が無残にも倒れてしまった。こういうことが起ころうとは日本の技術者は想定していなかったというわけですが、これこそモノメントとして後世に伝えるべきだと、私は保存を訴えたのですが、残念ながらいち早く破壊されてしまいました。アメリカのサンフランシスコは残っているんですね。地震で高架道路が壊れのをしっかりと残しております。残しておく、伝える時に使えるわけですが、日本は全部なくしてしまう。これも1つのまじいやり方だという気がします。

私自身は大学を出てすぐに大阪府技師として大規模な土木事業でありました千里ニュータウン開発の宅地造成の実施設計を担当しておりました。大規模な開発なので、洪水対策の仕事も現場で経験しました。そういう技術の専門家としての視点からいろいろな災害をみてまいりました。

災害にはいろんなパターンがありますが、全部に共通していることがあります。一番共通しているのが災害でやられるのは誰かということです。貧乏人です。貧乏人がやられるのが災害。水害の場合は特に分かりやすく、金持ちはほとんど水害に遭わない。初めから危険なところには住ま

ないし近づかない。どうしても住むときは、お城のような家を築きます。危ないところは地価も安い。だから、やられるのは貧乏人。貧困の問題と災害は深い関係があります。

災害にはすべてに共通した構造があります。これを解明したのが佐藤武夫、奥田穰、高橋裕さんが1950年代に出された名著『災害論』であります。

彼らは、災害には、自然の猛威などの「災害の素因」がある、とといいます。もともとこれが災害の原因であるところの、例えば大雨が降る、地震が起こる、大風が吹くといったことです。そして「素因」を災害たらしめるものを「必須要因」と名づけています。

誰もいない無人島で大雨が降っても災害にならない。簡単に言えばそういうことです。人がいるから災害が起こる。災害は天災ではなくて全て人災である。つまり人がいるから災害になる。こういうのを「必須要因」と整理しています。

問題はその災害をさらに巨大なものにする現代社会のありようです。彼らはそれを「拡大要因」と名づけました。普通の災害で終わらなくて大災害にしてしまう。例えば、大都市には人がいっぱい集っている。これが拡大要因なのです。もっと分散して、それぞれが機嫌よく日本の国土の中うまく住みこなすことができれば、拡大要因を小さくすることができる。

素因である大雨、大風。これは人間の力ではなかなか制御できない。ここ何年間のうちに台風の進路を変えることができると言われているのですが、やっていいのかという問題もある。台風の目玉の中にミサイルをぶち込んで、台風の目を潰してしまえば台風は止まる。アメリカでもカトリーナ以降ハリケーンをつぶそうかという計画が進んでおります。このように芽を摘む、素因を動かすことも可能であるわけですが、これをやると別の災害を招くかもしれないし、逆に台風が来ないとまずい面もあるのです。

自然の環境には、ときどき「かく乱」というものが需要で、混ぜかえす「かく乱」

がないと自然は元気にならないと言われて
います。だから素因を動かすことは私は
諦めたほうがいいと思います。そういう自
然に逆らうようなことをしない。「素因」
を災害にする人為的な「必須要因」を減ら
す。さらに「拡大要因」を出来るだけ無く
してしまう。ここで勝負をするというのが
真の災害対策ではないかと思ひます。

私の災害研究の目的は、災害を減らして
無くすことであります。災害の研究にはい
ろいろあって、研究のための研究というの
が結構あります。ここでどういうことが起
こったというのではなくて、それをどうす
れば災害を減らすことができるのかとい
うところに応用する、そういう姿勢を持
って研究したいと常に思っています。私の研
究の結論的な方向とは、自然の猛威を、
人々が力を合わせてしのいでいこう。猛威
を押さえ込むのは無理なので、しのいでい
こうということで、「『しのぎ』の防災シス
テム」と名づけたわけでありましたが、その
ヒントはここです。



みなさん覚えていませんか？2004年、5年
前でありますけれど、由良川でバスの上に
29人が本当によく耐えたと思います。怖か
ったと思います。よく生き延びたと。この

人たちは同窓会をつくっていると思ひま
す。ところが、アメリカのハリケーン・カ
トリーナの時のミシシッピ川でまったく
同じような写真があります。(TIME誌より)
バスの上に人間は逃げるのですね。これ
で生き延びたのです。何とか生き延びれば
どうにかなる。死んだらおしまい。生き延
びることが出来れば何とかかなると、ここ
が私の防災論の基本です。

【3 災害は進化する】

現代と第二室戸台風災害の時代との間
には、人々の暮らしや考え方、地域の環
境などに大きい変化があります。だから、
その変化を見据えて対策を考える必要があ
ると思ひます。議論する時間が無いので問
題点だけ紹介しておきます

年配者の経験や記憶を大切に。ただし、
鵜呑みしてはならない。判断力をもて。

クルマ社会化 携帯電話、パソコンなど
の普及。

過疎過密の進行、市町村合併、自治体財
政の危機。

開発の進行、流域保水力の低下、環境や
地形の変化、危険な地域の拡大、人口の集
積。

人々の暮らしぶりの変化、災害に弱い
人々が増えた、社会の助けあい仕組みの減
衰。

災害待ちの社会構造進行、儲けのネタと
しての災害、貧困と災害の深い関係。

GPS、GISなど宇宙からの眼、世界に情報
が飛んでいく時代。

公務技術の危機、場を知らぬ技術者たち、
被災者の心情を理解し、かつ高い技術力を
備えた、暖かい心を持った技術者をどん
どん育てなければならない、のだが・・・

もっとたくさんある筈なので、みんな
で議論して、共通の認識をもつことが大切
だと思います。

【4 いいまちづくりが防災の基本】

「人命か環境か」ではなく「人命も環境
も」：防災とはコンクリートでがちがちに
固めることではない。

「まちづくり」の視点にたち、自然の魅
力と猛威と、いかに共存するか。

防災まちづくりの究極の目標：守るに値

するいいまち「花鳥風月のまちづくり」。
 (1) まちや地域や環境をこよなく愛する人々を増やすこと：「防災の文化化」。
 (2) ソフトとハードの巧みな組み合わせによる「しのぎ」の防災システム。



『いいまちづくりが防災の基本』(片寄俊秀著イマジン出版 2007 年)という本を書きまして、この本がこちらの方々の目に留まって今回この場に呼んでいただいているわけでありま

すけれども、いいまちづくりをするのが防災対策だよということを説いております。防災まちづくりとは、コンクリートでガチガチに固めるのではなくて、自然の猛威を押しさえ込もうという発想が間違いで、その脅威と同時に自然の魅力といかに共存共栄するか、防災から減災への発想の転換、被害を限りなく減らそう、それが防災になるという考え方です。

ソフトとハードと言いますが、ソフトは仕組みであります。ハードは例えば河川を改修するといったことも含めた物理的なことであります。その巧みな組み合わせで減災を進める。何よりもわがまちをこよなく愛する人々を増やすことであります。それには愛するに値する「いいまち」をつくる。わがまちを何とか「いいまち」にする、わがまち、わが家族、わが知り合いを救いたいという気持ちにならなければ、災害対策はできない。

私は今日淀川の下流から参りました。大阪のほうは怯えております。淀川がもし氾濫すると、一番深いところで 4~5m は浸水する。0m 地帯のところの、本当に危険地域に多くの方が住んでいます。しかもそこに、先程言いましたように、拡大要因、その一つは地下街なのですが、地下街がどんどんどんどん増えています。地下街だけではなく地下施設、地下鉄、地下の通路、地下の商店街、ビルの地下、地下駐車場、地下鉄がどんどん伸びております。危ないものがどんどん増えています。しかも今梅田

の駅の北側に北ヤード開発、ここにも大きな地下街が出来る可能性があります。至る所地下だらけ。それらが互いにつながっていますが、管理者はそれぞれ異なるので、何の連携もありません。防災訓練などしたこともないし、下手にするとパニックを引き起こしかねません。これがいざ、川が溢れると、とくに地震が起これると、河川堤防が決壊します。堤防が地震で倒れると、0m 以下ですから、地下に水がどんどん流れ込んでいきます。地震は水害でもあるのです。大阪はこのように「拡大要因」をどんどん増やしている危険なまちなのです。



そこで、次の世代へどうやってその危険を伝えていくのか、後半のシンポジウムでぜひいろいろお知恵を出していただきたいのですが、その一つに大阪にこんないい話があります。

京セラドームの傍に「安政大地震津波の碑」があります。この石碑は安政 2 年につくられたわけですが、今日も生きております。この碑には何が書いてあるのかと言いますと、ここに津波がきたときに、皆は船に乗って沖に逃げたわけです。沖に逃げれば大丈夫だろうと船で沖に逃げたのですね。ところが津波は波がくるのではなくて、潮の塊がどーんと押し寄せてくるわけです。船で出た人は、それに乗せられて皆陸に叩きつけられたわけです。大勢の方が亡くなりました。その事を反省して、津波のときは船で逃げてはいけません、ということがこの石碑には書いてあります。この石碑のところに、「願わくは心ある人、年々文字読みやすきよう墨を入れたまえ」毎年、墨をここに入れてください。そうすれば、

毎年心新たに、津波が来た時はこうしなくてならないんだということが再認識される。

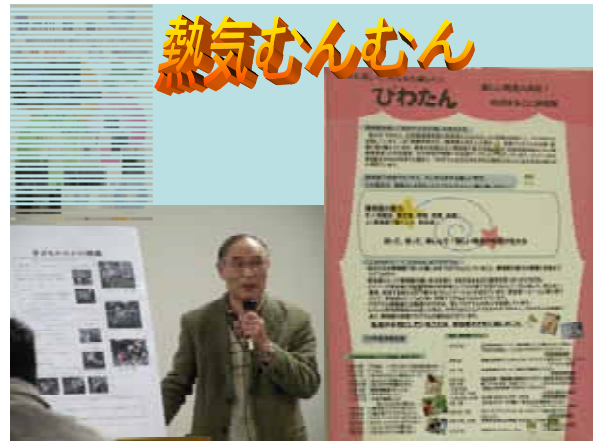
先日、そこへ行って見ましたら墨が黒々と入っていました。さすがに、先人はすごいものを残したなって思いました。こういう伝え方もあるのですね。ただ、私がこの石碑を探しに行ったら、「そんな石碑ありましたか？」って近所の人に言われましたので油断はなりません。こういうことを先人はやってきたのです。



そして、滋賀県民も実は頑張っておられます。今年の3月でありますけれども、滋賀県下の川づくり、防災問題、いい川をつくろうと活動をされている方々が 20 団体程集ってコンクールがございました。私はコンクールの審査員ということで参りました。いろんな話を伺うことができました。滋賀県には川を愛する人がこんなにもおられるのか、水辺が好きな人、防災を何十年もやっておられる方の話もありました。熱気ムンムンで、ここでコンクールをして 1 等賞を決めたわけではありますが、もめました。

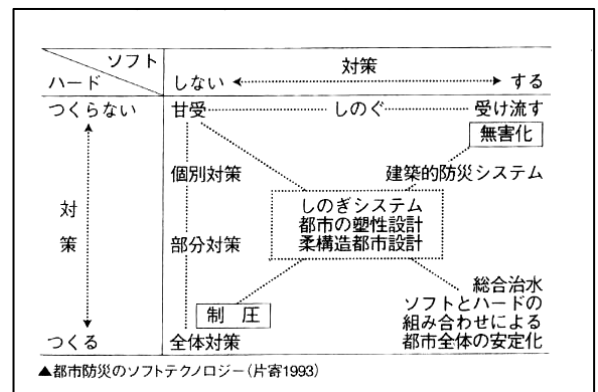
決まったサイズのパネルを持ってきて発表するという募集要項があったのですが、年配の方は大きいものをつくってこられたり、大きさがバラバラのをつくってこられたりするわけです。それも交えて審査をしたらいいと思っていましたら、会場から「募集要項と違うものを出した人が審査の対象となるのはおかしい」という声がありました。私は、ここで 1 等賞になっても何の賞品もないし、賞金もないからいいのじゃないかと言ったのですが、皆、むきになるのですね。「守ってきた、いい川を

つくってきた。1 等にならなくてなるものか。」と。結局、ルール違反の人は発表はするけど審査の対象にはならないということに決めて、その場を収めました。そのくらい熱気ムンムンで滋賀県は見所があるなど、いろんな人が川を愛し、水辺を愛しているなと思いました。



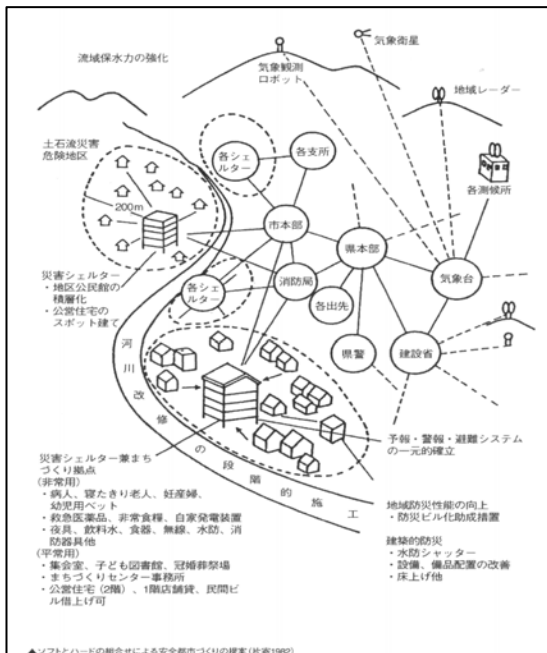
【5 「しのぎ」の防災システム】

さて、最後に私の提唱する『しのぎ』の防災システム」であります。



ソフトとハード、いろいろと組み合わせる防災のシステムです。ダムをつくるというのはハードな仕掛けです。私は決してすべてのダムを否定してはおりません。ダム

が必要な時もあります。否定をしませんと同時に別のいろいろな仕組みがあると考えています。それらを全部取りまぜて、まちづくりに一番いい方法を考えようじゃないか。自然の猛威に逆らうのではなくて、上手に受け流す。「柳に風」という言葉がありますけれど「しのぎ」、囲碁でよくしのぎの場面とか言いますね。一生懸命耐え忍ぶ。このやり方で災害の対策を考えようではないか。そしていいまちをつくるということに基本を置こうということでありま



近年では、国交省も方針としては、溢れるを前提としよう、伝統的な水防も活用しようという方向にきています。私が言い出したから国交省が変わったわけではなくて、こういう考え方は昔から日本にはあるのです。受け流す、柔よく剛を制するという考え方でありま。大事なものはその時にハードとして逃げる場所、これを『災害シェルター』と名づけていますが、割合身近なところに確実なものをつくっていく。これをお勧めしたいと思います。

先程、佐用町の水害で避難場所の設定の誤りを指摘しましたが、もっといい避難場所を、もっと身近なところに、それは行政まかせじゃなくて、民間も一緒になってつくっていくということが必要だと思いま。水の災害は割合、ある意味楽なのです。土石は怖い。水は高いところに行けば来な

いわけですから、ある意味では簡単です。『災害シェルター』をつくったらどうかと私が提案したら、京都市の私立の保育園の園長さんが、自分の保育園をそうしたいということでした。ご近所の方が700人位だったら3日間過ごせるといようなものにしたいと。保育園児を預かっている場所ですから台所があり、食糧や水や寝具などをある程度備蓄をしておけば、階段を伝って上って行けば水は来ない。そこで、何とかしのげるようなものをつくりたい。



私の友人である稲石勝之さんという建築家が私の話を聞いて「これだ」と思って各地で話を進めておられます。別に保育所でもなくてもいいのです。もっと小さい事務所や喫茶店やコンビニでもいいのです。そういうものを各地域にばらまく。今はネットで結ぶことができますから、災害救助本部とそれらをうまく結ぶことがこれからの防災のシステムで一番有効ではないかと思いま。それがソフトとハードをないまぜにしたうまい方法の1つであろうと考えていま。

滋賀県が全国に先駆けて「流域治水」という考え方を行政施策に取り入れられたことに心からの敬意を表したいと思います。このことに関連して気仙沼の畠山さんという「岩がき」の養殖業をやっておられる方がつくられた「森は海の恋人」といういい言葉があります。私はこれに「川は楽しいデートコース」と加えました。川はその部分だけではないけない。上流、中流、下流全部ひっくるめて考えなくてはならないのです。



現在の川は、上流では松枯れをしていますし、植林をした人工林のところは地面がカチカチで、これが災害の大きな原因になっています。この間伐材もうまく使ってまちづくりに活用する方法を考えなくてはなりません。下草刈りも大事です。多くの流域にはゴルフ場が出来てしまっているので、これをどうするか、これも大きな問題であります。ゴルフ場というのは、山を剥いており、洪水の流出原因になっています。

農地のほうも安心できません。土地改良で三面張りの水路が随分増えました。だから水が下流にどんどん走っていく構造になっております。昔の川はちょろちょろと流れていました。それを直線化した。直線化すると何が便利かといいますと、大量の水を狭い面積で流すことができるので、他の土地を有効利用することができる。私がニュータウンの開発を現場でやっていた時の原則はそれでした。だからニュータウンをつくりますと、河川は全部直線になります。直線で急勾配でつるつるにしますと、細い川、水路でも大量の水を流すことができます。

しかし、そのしわ寄せがすべて下流にいくわけです。下流がえらい目に遭います、

というのがこれまでの開発の姿勢でありました。じつは私は千里ニュータウンの開発の時にこういう河川をつくっていた技術者の一人です。私が死ぬまでにはこの川を何とか自然に戻したい。これを人生最後のマニフェストに掲げたのですが、どうやったらいいのか、まだ分かりません。三面張りの川を自然に戻すという実験が横浜で始まりまして、今、各地で行われています。スイスやドイツではすでに多くの実施事例がありますから、これは出来るのです。何とか実現したいと思います。

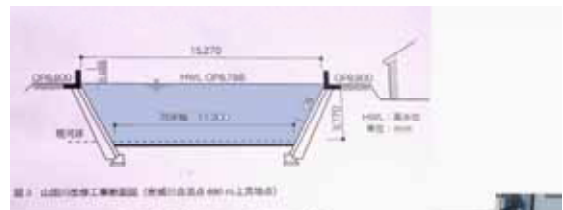
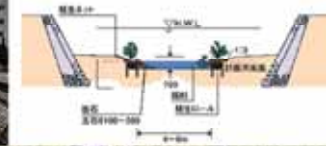
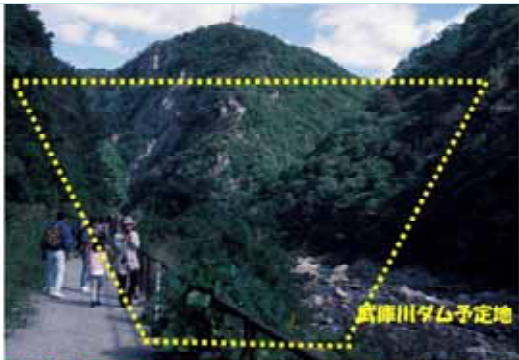


図 3 山形県河川工事事務所 (宮城川自然谷 400m 上流地点)



横浜市のいたち川





だからといって、ダムをつくればいいというものではない

そういうわけで、現在の日本の河川では、下流に一気に水が出るような構造ができあがっています。だから上流に治水のためのダムをつらうという計画が出てくるわけですが、そのためにたとえば兵庫県の武庫川の例のように、たくさんのハイカーが行くいい場所が、渓流が潰されてしまう。こういうことをいうと、すぐ「遊びと人命とどちらが大切なのか」と批判されるのですが、このレクリエーションの場の重要性を軽く見てはいけません。レクリエーションこそが人を「Re Create」再び元気にするのです。現代社会においては、人を元気にするレクリエーションの場は非常に重要でありますし、これだけの大自然をつくらうと思ってもつくることはできません。

もちろん人命を守ることは第一位に大切ですが、それをダムで守れるかという点、決してそうではありません。ダムには限界があって、想定をこえる流量がきたときにはむしろ危険な存在になることを知らねばなりません。だからダムに変わる総合治水の考え方が必要なのです。

[6 「防災」から「転禍為福」(禍ひを転じて福と為す)へ]

究極は『花鳥風月まちづくり』を目標としたいと私は提唱しています。

「花」は、花いっぱい華やかで住んで楽しいまち。その基本は商店街の再生です。いま全国どこでも商店街がダメなのですが、いざというときには商店街が防災の拠点として大いに活躍できるのです。例えば災害が起こりますと救援物資が来ます。救援物資を倉庫に山積みにして眠らせて腐らせてしまったり、どう配布していいのか

分からない。こういう時に商店街に持ち込むのです。商店街にはそれぞれのプロがおりますから、そこで商店街の人に物資をさばいてもらう。

災害が発生すると、行政がただちにお金に代わる地域通貨を発行して、それを被災者に配って商店街で買ってもらう。地域通貨は後でお金に換わるわけですから、商店街の人も損をしない。問題は、災害が発生したときに各地から送られてくる救援物資の中には、不要な物もたくさん集ってくるのです。必要のない年寄りのおむつだったり、誰も着ない古着だったり。需要と供給との関係がうまくいかないのです。そういう時に物のさばき方を心得ている商店街が防災の拠点になります。そのために普段から商店街を元気にすることが必要なのだと思います。

「鳥」は、鳥や魚やあらゆる自然とともに生きよう。自然復元といったことも大事ですよ。

「風」は、これが大事なのです。風土を大切にしよう、防災安全、そして風流なまちをつくらうということ。さらに風土と Food をかけまして、おいしい物が食べられるまち。

「月」は、月を愛でいいまちだなとゆったりとした気持ちでそのまちで生きていく。こういう『花鳥風月のまちづくり』こそがほんとうの意味での防災まちづくりではないかと考えています。

昔あったこんな水辺も復活させたいものだと思います。これは猪名川という兵庫県にある川です。日本は昔はこんな川ばかりだったのですね。



昭和27年(1952)頃の猪名川



昭和 27 年、私が子どもの頃はこんな風景でした。「ふんどし」をしています。「ふんどし」という言葉は若い人は知らないと思いますが、この間古橋さんが久しぶりに言ってくれました。「今の高速水着なんてなんだ！わしらはふんどしで泳いでいたんだ。」拍手喝采しましたね。夏は真っ黒に日焼けして夏休み終わったら黒さを競った。くろんぼ大会がありましたけど、こういったことが子供たちに川の楽しさと同時に川の危険も教えてきたのです。

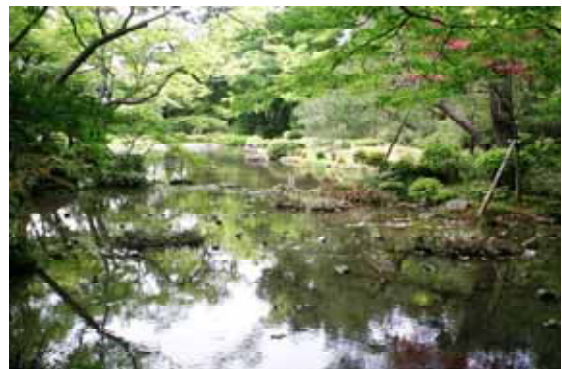
それを次代に伝えていく方法がありません。川が少しでもきれいになりますと、掃除をした、きれいになったということで子供が来ます。子供たちは川が好きなのですよね。でもごみが拾っても拾ってもありません。川づくりの基本はゴミ拾いからです。川をきれいにしないで、そこから何も出来ません。皆さんもこれからは防災を語る前に、皆で川掃除をしよう。そこから始めていただくと有効だと思います。もともと「良い子は川で遊びたい」のです。



いい川には「川ガキ」が群れたいのだが・

最後に日本庭園の技術でありますけれども、日本庭園の技術というのはいすごいものがありまして、私はまちづくりをやっております時に、造園の技術者と一緒に仕事を

しました。私は建築系の土木技術者ですが、建築とか土木とかの物づくりの人はつくったら「出来た、完成だ」と思うのですが、造園の人は違うんです。造園の人はだいたい 15 年から 20 年先に完成することを考えて若い木を植えて、初期投資は 1 ぐらいで、後の 9 ぐらいに力を入れて手入れして、じっくりと育てて完成する。15 年、20 年後が完成だということで最初の設計をすると言いました。それを聞いてから、私は日本の造園の技術というものを尊敬するようになりまして、そうやって育てるんだなと。私がつい維持管理という言葉を使ったら怒られました。「片寄さん、庭というものは育てるものなのです。」これと一緒に、まちもじわじわ育てていく、一気に変えるのではなくじわじわ育てて、よくしていく。そういうマスタープランをつくっていくということが、防災まちづくりの基本だろうと思います。



国土を生きかす知恵を造園技術に学ぶ 京・西野電設

【7 おわりに】

最後にいい言葉をお伝えします。「人に逆らっても自然には逆らうな。」知事さんもダムの問題、新幹線の問題等でいろいろ逆らっておられる。それはいいんです。人に逆らってもいいのです。自然に逆らってはいけません。ここがポイントであります。これは志賀高原で、色々な大規模開発で自然破壊が進むのに対して、たった一人で頑張って抵抗された山本教雄という人の言葉です。こっそり開発しようとしたら、どこからか山本さんが山のなかから現れて怒鳴ってストップをかけられたそうです。その方の遺言です。この言葉を皆様が心にとどめてくださるよう祈念して話を終わります。ご清聴ありがとうございました。